

R. P. ウォーレン (Robert Penn Warren) 著

『アメリカ南部を率ゐた男—

南部聯合國大統領 ジェファソン・デイヴィスの復権—』

(Jefferson Davis Gets His Citizenship Back, 1980)

本書は二十世紀アメリカ文学を代表する一人、ロバート・ペン・ウォーレンの最後の著作である。本書でその生涯が描かれる南部聯合國大統領ジェファソン・デイヴィスとウォーレンとは、同じケンタッキー州トッド郡に生を享けた。それゆゑ、トッド郡の地元紙「トッド・カウンティ・スタンダード」の面上部の左右には、郷土の生んだ二人の傑物を顕彰すべく、ウォーレンの生家及びデイヴィスの記念碑の寫眞がそれぞれ印刷されてゐる。二〇〇一年、春、私はケンタッキーを旅行してトッド郡を訪ねた際、その新聞をデイヴィスの記念碑の近くで入手して、今も時々學生に見せたりしてゐるが、それはともかく、本書はデイヴィス傳でもあり、ウォーレンの個人的回想録でもあり、アメリカ南部文化論でもあり、南北戦争論でもあつて、小冊ながら、内容は多岐に亙り、殊にウォーレン文學に親しんでゐる者には興趣の盡きない書物である。

ウォーレンが本書を執筆するに至つたのは、一九七九年、デイヴィスが米上院によつて公民権を恢復され、それを祝ふ式典がトッド郡で開催されて、ウォーレンもそれに出席したのが切掛けである。鄙びた田舎町の式典の様子の描寫や、久しぶりの歸郷の感慨などが巧みにちりばめられて、本書の情味を深めてゐるが、それにしても、南北戦争が終結したのは一八六五年だから、爾來、百十四年間、デイヴィスは「非國民」扱ひされてゐた事に

なる。今でも、特に北部の知識階級の間では、デイヴィスは決して好かれてゐない。と云ふより、奴隸制に支へられた前近代的な南部を代表する人物として、寧ろ嫌はれ、輕蔑さへされてゐる。數年前にも、「自分はデイヴィスを尊敬してゐる」と公言したトレント・ロット上院議員（南部ミシシッピ州選出）が、「ニューヨーク・タイムズ」によつて如何にも蔑むやうな扱ひを受けてゐたのを憶えてゐるが、本書から立ち現れて來るデイヴィスは、古風な價值觀を信じつつ激變する時勢に誠實に、かつ不器用に立ち向ひ、心ならずも南部聯合國大統領に選ばれてからは五年に亙る苛烈な戦争を指揮し、敗戦後は烈しい屈辱に曝されながら最後まで南部の正當性を信じ続け、南部人としての誇りを失はなかつた悲劇の人物に他ならない。以下、アト・ランダムに、本書から數箇所を譯出する。

南北戦争に南軍將校として従軍した、ウォーレンの祖父の思ひ出より

ある日の午後、祖父が物思ひに耽るやうな眼差をしながら、かつての自分は聯邦主義者だつたと云つた時、私は飛び上らんばかりに驚いた。すると、祖父は續けて云つた。「詰

り、南部の聯邦離脱には反対だったといふ意味さ。同胞が汗水流して作り上げた國がばらばらに分裂して、バルカン化されて了ふ姿なんぞ、決して見たくはなかつた」。〔後に解つたが、「同胞」とはヴァージニア人を云ふのだつた。〕「バルカン化」の意味を私は知らなかつたが、祖父が説明してくれた。祖父によると、ひいお祖父さんのエイブラムは大佐として獨立戦争を戦つたし、伯父（それとも同じ世代の従兄弟だつたか）は獨立宣言文に署名した一人であつた。また、奴隸制は長續きしないと自分は前から知つてゐたのも祖父は云つたが、彼が奴隸を何人か所有してゐた事は話の端々から解つてゐた。例へば、キャット婆やの場合がさうだ。祖父の乳母で、祖父より二十年も長生きし、祖父が家族を率ゐてテネシーからケンタッキーに逃れた時には、彼女も従つてゐたといふ話だ。戦時には「皆、家族と一緒に行動したものだ」と祖父は云つた。しかし、南北戦争について違つた調子で語る時もある。彼はそれを「政治屋どもの戦争」と呼んだ。或は、「起る必要のない戦争だつた。南部の聯邦脱退論者と北部の奴隸制即時廢止論者、詰りどちらも過激な馬鹿者どもが惹き起した戦争だ」とも云つた。恐らく祖父は歴史が合理的である事を期待したに過ぎない——が、それこそはこの上なく非合理的な期待であつた。

デイヴィスとリンカーン

デイヴィスの誕生から一年も経ずして——勿論、彼が語るに足る性格も志望も具へる以前の事だが——もう一人の男子が數百マイル離れたケンタッキーのもう一軒の丸太小屋で、更に貧しい親の下に生れた。エイブラハム・リンカーンの兩親はさして明確な野心も持たず北方に向ふ人々の流れに捲き込まれ、オハイオ川を越え邊境地帯に至つたが、そこでエイブラハム少年は貧困と苦難にめげる事なく、他人より抜きん出たいといふ不屈の意志に驅り立てられ、教育を身につけるため、また、己れにふさはしいと自ら感じた權力の世界の地位を獲得するため奮闘した。中年になりかけた頃、邊境の丸太小屋で生れたこの少年は出世して町の大きな白堊の家に住み、法律家として結構な報酬を稼ぎつつ、政治の世界にも手を出した。リンカーンはまた驚くべき體力にも恵まれてゐて、それが、一八六一年から一八六五年に及ぶ苛酷な時期を乗り切る支へとなる譯だが、その同じ時期、デイヴィスはさほど遠からぬリッチモンドにあつて、不健康、不眠、神経痛に苦しんだ。もしもリンカーンの父トーマスが南方のミシシッピ州に向ふ人々の流れに乗つてゐたら、どういふ事になつてゐたであらうか。新しい人口移動の流れの中で、精力や狡知が人をして大

ならしめた土地——ウィリアム・フォークナーの曾祖父が一文無し若者として渡つて来て、やがてフォークナー自身が描く事になつたかのミシシッピ州に向つてゐたとしたら。或は逆に、デイヴィスの父サミュエルが幸運を求めてオハイオ川を越え、北方に向つてゐたとしたら、どういふ事になつてゐたであらうか。人間といふものは、一體如何なる程度まで、自らの社會の産物なのであらうか。

デイヴィスと奴隸制

初期の時代の多くの南部人と同じく、ジェファソン・デイヴィスは幾分無自覺な南部人で、多くの州をさまよひ歩いてゐたし、かつては聯邦への忠誠を誓つて重々しく宣誓した事もあつた。それに、彼の生れた南部はミシシッピの遙か北方にあつた。所が、今や、この放浪者デイヴィスはミシシッピ人となりつつあつた。人間關係や學習によつてのみならず、職業によつても「南部化」されつつあつたのである。何しろ、彼は農園主であり奴隸所有者でもあつた。とは云へ、他の多くの奴隸所有者とは大分異り、奴隸制が聖書の

正當化する永續的な制度だなどとは明らかに考へてゐなかつた——少くとも、一貫してそんな風に考へた事はなかつた。奴隸解放の日程が定かならざる歴史の流れの直中であつて、彼がやろうとしたのは、黒人が解放された曉に、無慈悲な競争相手たる白人の食ひ物にされないための訓練場として、ブライアフィールドの農園を組織化する事であつた。デイヴィスが黒人と白人の平等を信じてゐたなどと云ひたいのではない——リンカーンも多くの奴隸制即時廢止論者も、そしてまた白人の大多數もそんな事を信じてはゐなかつた。しかし、漠然たる限界内に於てではあつたが、黒人の進歩及び教育の可能性に、デイヴィスは斷固たる確信を懷いてゐた。

南部と北部に内在する本質的相違

概して云ふなら、多くの個別的な問題の根柢には、南部聯合國の本質そのものに元來具はる、厄介かつ根本的な問題が存在してゐた。或は、かう論じてもよいであらう。すなはち、南部には認められない或る精神状態が北部には存在してゐて、それが他の全ての要因

の根柢をなす本質的要因として作用したと。北部の哲學は體系化されたものではなかつたが、我々はその本質を、ウィリアム・ジェイムズをしてプラグマティズム哲學へと赴かしためた思索の脈絡の中に明確に見て取る事が出来る。それは歴史を抽象的かつ固定的な原則に基いて理解しようとするのではなく、變化する諸價值や偶然の事象の動揺ただならぬ流動體として把へ、それらが置かれた状況に基いて、その一つ一つに個別に向ひ合はうとする精神の在り方であつた。カルフーンもデイヴィスも（他の無数の人々と同じく）合衆國憲法をモーゼがシナイ山から持ち來らした石版に等しいものと理解したが、對照的にリンカーンは、ホームズ判事が法の發展について記した時と同じく、明らかに進化論的な見地から憲法を理解した。

經驗を重視するかかる北部の傾向は、疑ひもなく勝利に大きく貢獻した。まづ、リンカーンについてだが、彼は初期の不活發な時期を通過するや、嚴密な法の解釋なんぞは躊躇なく無視して行動した。適法性なんぞ一切顧慮する事なく、單に嫌疑が掛つただけで、もしくは甚だ根據に乏しく先入見に充ち満ちた噂話に基いて、北部の多數の市民を拘束し、人身保護令狀に基く權利も最高裁判所も全く無視して、拘束した市民が外部と聯絡を取るのを禁止した。同様の精神に基いて、リンカーンは電信局を一齊に急襲して電報を

強奪させ、また、法的權限が全く無いにも拘はらず、財務省に要求して必要なだけの資金を調達しようとした。リンカーンは憲法に一定の敬意を表しはしたが、それは、自分は憲法を破る事によつて憲法を救つてゐるのだ、といふが如き彼の發言に示された類の敬意でしかない。（若き日のリンカーンが、自然と人間をめぐる進化論的な獨自の思想を、絶對者への信仰に取つて代はらせた事實を想起してもよいかも知れない。）なるほど、一八六〇年二月二七日、リンカーンはクーパー・ユニオンに於て、「正義は力なり」と宣言した。「善」は「強大な力」から生じ、あらゆる社會は「人の死によつて支へられる」といふホームズ判事のプラグマティックな言明には、リンカーンは最も懷疑的で暗澹たる思ひに囚はれてゐる時でもなければ同意しなかつたであらう。けれども、社會が非合法的な拘束の上に成立し得るものであり、法律も憲法もとの詰りは、必要、嗜好、及び冷酷無情な權力に左右され得るものであると、明らかにリンカーンは信じてゐた。

ここで問題とすべきは、リンカーンとデイヴィスといふ二人の個人を分ける相違以上のものである。それは二つの社會に内在する本質的相違でもあつた。一方は舊來の價值を信奉し続け、他方は新たななる價值を推進する途上にあつた。

「近代人」シャーマンとグラント

總力戦を發明した新しい人間達の中でも最も有名なのが、勿論、シャーマン將軍である。當初、彼は「近代的」ではなかつたが、經驗の論理を容赦無く追究し、今日我々が自明とみなす考へ方に到達した。敵とは「敵對する軍隊」のみならず、「敵對する人民」でもあるといふ事になつた。シャーマンによれば、恐怖は「武器」であつて、「戦争は人氣取りではない」のである。シャーマンの論理からコヴェントリの猛爆、爆鳴彈によるロンドン空襲、焼夷彈によるドレスデン攻撃、東京大空襲、そして廣島への原爆投下までの間には、一直線の論理の絲が通つてゐる。戦争は地獄だつたし、地獄ならしむるべくシャーマンは懸命に努力した。しかし、ひとたび論理的目的が達成されるや、南部の苦しみは「理解を超えるもの」だつたと、彼は書く事が出來たのである。

グラントに關して云ふならば、彼もまた近代的な人間だつたが、それは後年に至つて彼が富や太い葉巻や大實業家を崇拜したためばかりではない。元來、彼は血を見るのが大嫌ひで、肉も焼き過ぎるくらゐに焼かないと（それも大きい動物の肉でない）食べられないくらゐだつたが、やがて「屠殺人グラント」と仇名されるまでに成る。リーと直接對峙

する事になつて、戦争のチェス盤上ではたうてい勝ち目が無いと知るや、とことん血の流し合ひの戦争をやる。血のバランス・シートのみが勝利を確實たらしめると知つたからだ。それに、彼には流し合ひに幾らでも使へる膨大な量の血があつた。そして、血の流し合ひのシステムが最大限に効果を發揮出来るやうにするために、死者の埋葬も負傷者救済のための停戦も彼は一切拒絶した。同じ理由に基いて捕虜の交換も拒絶した。前線で戦つてゐても、アンダーソンヴィルの南軍捕虜収容所で飢餓に苦しんでゐても、同じく祖國に奉仕する事は出来るといふ譯だ。如何なる代償を拂つても絶え間なく壓力を加へ續ける事こそが、血を見る事を忌み嫌つた男の、しかしまた、現實と眞つ向から向き合ふに至つた男の、選り取つた方法だつた。グラントは飽く迄も論理的で、戦後、自らが發展させた理論についてかう語つた。「戦争のやり方は洵に單純である。敵の所在を發見し、出来るだけ早く敵を捉へ、出来るだけ強く叩き、前進し續ける、それだけの事さ」。戦時中は軍人、戦後は判事となるホームズが父親に書き送つたやうに、これは、「屠殺人の請求書」への支拂ひが可能な限り、正に完璧な理論である。種類は違ふが、グラントを「近代的」軍人たらしめたもう一つの要因がある。T・ハリー・ウィリアムズが指摘したやうに、グラントは軍事的思考と政治的思考との關係を發展させた。彼とリンカーンとは互ひに理解し合へた

のである。

かはいさうなデイヴィス——彼は如何なる意味に於ても近代的人間ではなく、寧ろ、革命的現實に對處すべく呼び出された保守的人間と云つてよかつた。兇運に苦しみ、諸々の無能や愚昧に取りかこまれながら、恐らくは、勝利以上に名譽が彼の導きの星だつた。リーヤリチャード・テイラーやその他の人々と同じく、決して勝利を信じてはゐなかつたらうが、己が州への忠誠を、デイヴィスは何よりも優先したのであつた。